

ヴェルギナにおける墳墓の埋葬形態に関する考察

松尾登史子・安永信二

序

M. アンドゥロニコス (Andronikos) により1977年に発見され「フィリポス II 世 (Philippos II : 在位前359~336年)」の墓と比定された未盗掘の「マケドニア墓 (Makedonikos taphos)」は、大墳丘 (メガリ・トゥンバ : Megali Toumba) が覆う他の埋葬建造物と共に全世界の注目を浴びた (図1-a,b)。そして、この比類なき墳墓、特に絢爛豪華な内装や調度品、副葬品の調査は、マケドニア考古学研究に大きな飛躍をもたらすこととなる。ヴェルギナ (Vergina) が古代マケドニアの旧王都アイガイ (Aigai) であったことを示すひとつの大きな実証となり、また、マケドニア本土に分布する古代マケドニア独自の「マケドニア墓」の本格的調査、更にはマケドニア葬制研究の嚆矢となった。

この類まれな大墳丘の存在により古代マケドニア関連の遺跡として唯一世界遺産と

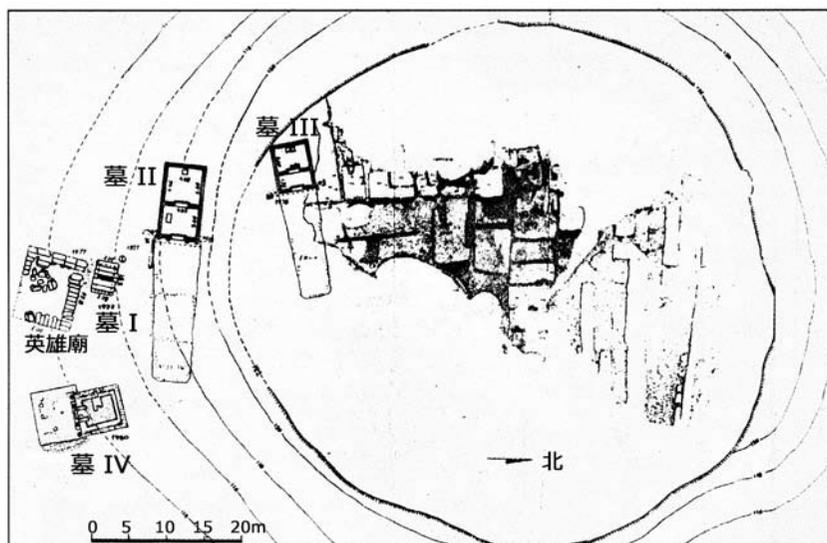


図1-a ヴェルギナ大墳丘平面図



図1-b ヴェルギナ大墳丘発掘時の光景（1980年）

して登録されることとなったヴェルギナの考古遺跡であるが¹、大墳丘周辺には多くの王国存続期の墓が出土しており、またその南の丘陵部には都市部が展開し、現在も継続中の調査により重要な建築遺構が次々に発見されており、遺跡全体としての重要性は増す一方である（図4）。近年の成果を挙げるならば、2008年夏に都市部のアゴラで前4世紀末の王族級若年者のものと判断される埋葬一式が出土しており、その解釈および当エリアの宗教的重要性についての論議を呼んでいる²。

実際、ヴェルギナにおいては、都市部のみならず墓所部（ネクロポリス）についてもまだ未解明の部分が多い。大墳丘以外にも大小の墳丘下に埋葬主体部を内包する墳墓が数多く存在し、埋葬主体部が室形である所謂「マケドニア墓」が10数基、そして、埋葬主体部が箱形である箱形墓（Kivotioschimoi taphoi）が30基以上出土、その他の簡素な土壙墓（Lakkoeides taphoi）や陶蓋墓（Keramoskepeis taphoi）なども多数確認されてきたが、被葬者の詳細や各墓類型の相互関係などは殆ど明らかにされていない。

本稿では、ヴェルギナの数ある墓類型の中から古代社会上層に属するとみられる建造墓³を取り上げた分析を行ない、背景にあった社会上層の実態の一端を明らかにしたい。特に、規模や被葬者の社会階層、築造時期などの観点において「マケドニア墓」と関連が深い、より長期にわたって存続したとみられる箱形墓について現時点での出土データをとりまとめ、特に埋葬方法に着目して分析を行なう。

I. 本論の背景

本論の背景として、マケドニア葬制研究とヴェルギナ・ネクロポリス調査についてその研究史を概観する。その際、分析対象である箱形墓、さらにこれと関連の深い室形墓（Thalamotoi taphoi）について焦点を当て、それをめぐる諸問題について整理し、問題設定に至った経緯を述べる。

(1) マケドニア葬制研究とヴェルギナ・ネクロポリスの調査

古代マケドニアの葬制に関する調査・研究の開始は19世紀後半に遡り、当時現地に出入りしていた欧州列強の手によりヴェルギナ近郊のパラティツア（Palatitsia）やテッサロニキ（Thessaloniki）など各地に分布する墳丘が確認された⁴（図2-a,b）。ヴェルギナでは1861年にフランス人 L. ユゼ（Heuzey）が建築家 H. ドメ（Daumet）と共に初めて現地の調査に入り、アギア・トリアダ（Agia Triada）地点にて宮殿の東部分、および、パラティツア村西のヴェルギナ村との境界付近で「マケドニア墓」を発見した⁵（図4）。

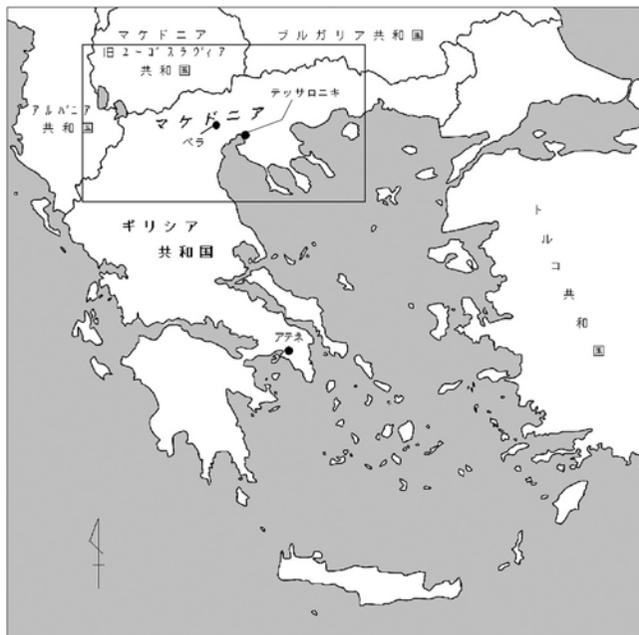


図2-a ギリシア地図（図の枠内は図2-bの範囲）

20世紀に入り、バルカン戦争（1912～13年）、オスマン・トルコからの解放（1913年）後、2つの大戦を経て、内戦（1943～49年）が終結するまでの長い混乱期にも外

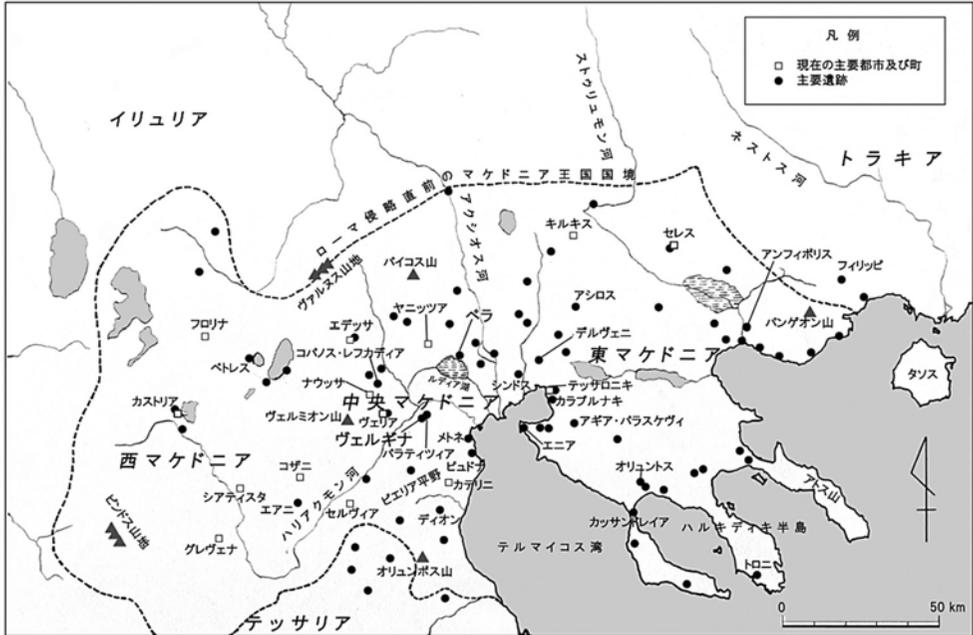


図2-b ギリシア領マケドニアにおける都市・集落遺跡（先史～ビザンツ期）の分布図

国人による調査が散発的に行われる一方、G. ソティリアディス (Sotiriades) や K. A. ロメオス (Romaios) らギリシア人による調査が徐々に開始された⁶。ヴェルギナでは、1938年にロメオスが調査を開始し、ヴェルギナ村近くで2番目の「マケドニア墓」を発見した⁷。この時期までに調査された「マケドニア墓」はまだ特に注目されていなかった。

内戦終結後1950年以降から、マケドニア考古学においてギリシア人による本格的発掘調査が開始され、同時に葬制に関する研究も進展するようになる⁸。ギリシア考古学局やアテネ考古学協会、テッサロニキ大学などによる組織的な発掘調査が行われる中、1962年に調査されたデルヴェニ (Deriveni) の墓群は前4世紀末と比定され、豊かな金製副葬品が出土し、古代マケドニア葬制研究の大きな端緒となった⁹。一方、ヴェルギナでは、ロメオスが X. マカロナス (Makaronas) と共に第二次世界大戦で中断された調査を再開し (1954～56年)、更にテッサロニキ大学の G. ヴァカラキス (Vakalakis) と M. アンドゥロニコスが発掘調査を続行していた (1959～1980)¹⁰。後者の調査において大墳丘の発掘が行われ、フィリポスII世の墓と比定される未盗掘の埋葬建造物の規模と絢爛豪華な副葬品はマケドニアのみならずギリシアおよび欧州の注目を集め、その後のマケドニア葬制研究を大きく発展せしめることとなった。この王墓の独特のつくりから「マケドニア墓」と呼ばれるようになり、以降「マケドニ

ア墓」への関心は飛躍的に高まり、マケドニア地方各地の古代墓の調査件数は増加の一途を辿った。1980～90年代には、テッサロニキ周辺のシンドス (Sindos) やアギア・パラスケヴィ (Agia Paraskevi)、ピエリア平野のピュドナ (Pydna) などで古代マケドニア葬送習慣に関する貴重な情報を提供する重要な墓群が日の目をみることとなった¹¹。

これらの研究から明らかになった古代マケドニアの墓葬形態 (墓類型) は、おもに土壙墓、箱形墓、室形墓であり、陶器を使ったタイプでは、甕棺墓、陶蓋墓などがある。多くは大小さまざまな規模の墳丘を伴うが、その法則性は明らかにされていない。なかでも、規模や構造の面から注目に値するのが箱形墓と室形墓であり (図3-a,b,c,d)、背景となるマケドニア社会の上層階層を被葬者とすると思われるこれらの墓の盛衰は古代マケドニア王国のそれと連動すると考えられる。本稿で対象とするのは主にヴェルギナの箱形墓であるが、同墓と相互に密接に関連すると考えられる室形墓と共に、以下に、これらの今日までの研究と調査の現状について述べる。

箱形墓とは、古代ギリシアにおいて、方形の土壙あるいは岩壙を穿ち、場合により、内側を石板や方形石で補強した墓であり、古くは青銅器時代に遡る¹² (図3-b)。マケドニアでは各地に分布が見られるが、少なくとも前5世紀には墳丘が覆う形で出現し

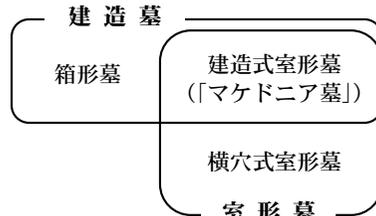


図3-a 箱形墓と室形墓の関係図

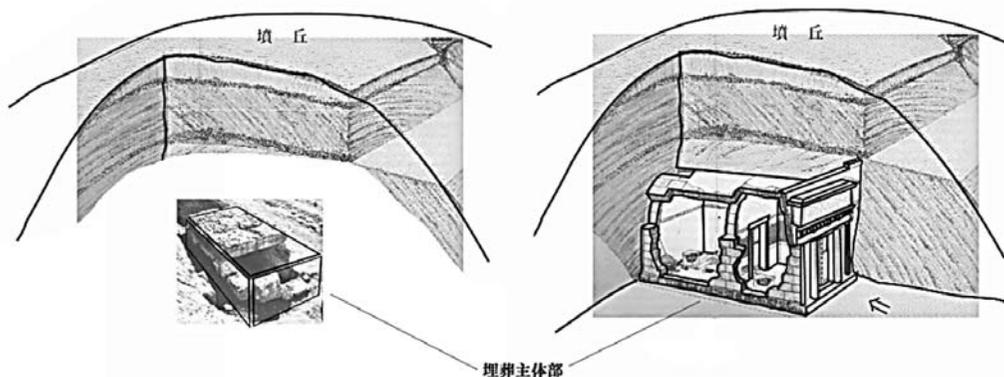


図3-b 箱形墓 (左) と室形墓 (マケドニア墓) (右) の模式図

ている¹³。前4世紀には大型化しており、室形墓との共通要素が多くなり一部はその区別が曖昧となる。前5～4世紀の墳丘を伴った箱形墓は、ヴェルギナやデルヴェニをはじめ、エニア（Aineia）、テッサロニキ、広域ペラ（Pellaia Chora）、などで出土している¹⁴（図2-b）。これらのマケドニアの箱形墓の調査・研究において最も注目されてきたのは副葬品である。古代マケドニアでは夥しい数の金属器を副葬する慣習が前6世紀に遡る。デルヴェニの調査にて出土した箱形墓の夥しい金属器の出土量はヴェルギナの大墳丘の王墓に劣るものではない¹⁵。

室形墓は、ヘレニズム期マケドニアの墓葬形態の特色といえ、前4世紀後半に出現した。マケドニアに確認されている室形墓として、建造式室形墓（「マケドニア墓」）および、横穴式室形墓（Laxeftoi Thalamotoi taphoi）¹⁶の2つが挙げられ、ヴェルギナでは前者のみ出土が確認されている（図3-a）。この「マケドニア墓」の特色は、単室あるいは複室構造の埋葬主体部を持ち、蒲鉾型天井を頂き、正面形態は神殿風である（図3-b）。墳丘に覆われ墓道を持つ。前4世紀第3四半期から前2世紀半ばまで、古代マケドニア王国の勢力が及んだギリシア北部マケドニア地方を中心に分布する一方、小アジアや南部ギリシアにも僅かに点在し、その分布はエーゲ海沿岸一帯に広がる¹⁷。1993年時点で総計80点余りが確認されており¹⁸、うちマケドニア地方における出土数は60点余りにのぼる。



図3-c パラティツアの箱形墓（表番号40）写真

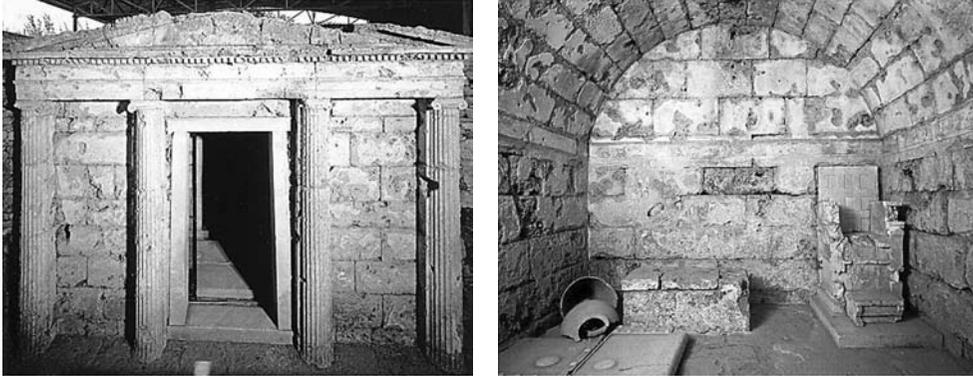


図3-d 「ロメオス」の墓(表番号31) 写真：正面(左)、内部(右)

(2) 問題の所在

上述のような経緯を辿ったマケドニア葬制研究であるが、1970年代末の大墳丘の調査以降に「マケドニア墓」の調査を軸として研究の裾野を広げており、現在は従来殆ど注目されて来なかった土壙墓などの簡素な墓の調査の報告も充実してきた。副葬品に関しても目を見張る金属器や芸術的価値の高い彫像や壁画のみならず、ランプや香油瓶、食器などの陶器類の分類と出自に関する研究も行われ、また更に火葬や土葬などの埋葬儀礼の方法の検討なども見られるようになってきた¹⁹。しかしながら、これらは専ら建築史や美術史、古典研究的な観点から行われており、いわば古典や美術の観点から価値あるものを重点的に研究している状態といえる。ヴェルギナ・ネクロポリスの場合、現在も大墳丘の「マケドニア墓」に関わる諸問題、特に、都市や被葬者の同定、建築学的な起源、等についての議論は注目されているが²⁰、土壙墓や甕棺墓、陶蓋墓などの小規模な墓を含めた総合的な葬制研究は行われていない²¹。

筆者は、ヴェルギナの墓葬形態を概観して、「マケドニア墓」が王族級の墓であれば、同じような規模をもつ箱形墓も同等階層あるいは社会上層に属すとみなし、これらの墓形態の相互関係をみることで当時の社会の上部階層の一端を解明できるのではないかと考えている。そもそも、「マケドニア墓」の起源について行われてきた議論では、自生説として、方形土壙墓に系譜が辿れるとする説²²、箱形墓から発展したとする説²³、等が提示されており、ヴェルギナ・ネクロポリスに存在する方形土壙墓、箱形墓、「マケドニア墓」を含めた分類・編年研究、ひいてはマケドニア全体における墓葬形態体系化の必要を示唆するものであると考える。このような視座から、本稿では、「マケドニア墓」と同じく大規模であるがあまり光が当てられていなかった箱形墓²⁴のデータを「マケドニア墓」と共にとりまとめ、相互に比較・検討する基盤を提示しつつ、そこから背景となる社会解明の糸口を探る。

II. ヴェルギナ遺跡とネクロポリス

(1) 遺跡概要

ヴェルギナ遺跡は、ハリアクモン (Haliakmwn) 川がピエリア (Pieria) 平野とヴェルミオン (Vermion) 山麓を分かち豊かな平野に注ぎ込む地点から東に6キロメートルのヴェルギナ村と、その東2キロメートルのパラティツィア村の間に位置する²⁵ (図2-b,4)。

ピエリア平野の北部を占めて概ね北東方向を向いた緩やかな斜面上に広がった都市遺跡は、南の都市部と北のネクロポリスで構成される (図4)。都市部は南側に山地がそびえ南西側は谷に阻まれる形で守られ、北の平原側の方向のみが外部に開け、ネクロポリスは斜面の麓からハリアクモン川に至る平野に展開していた²⁶。この守備的地形に加えて、強固な周壁が四方から都市を守っていたとみられる。既述のように19世紀後半から調査が始まり、現在はテッサロニキ大学により調査が継続されており、先史時代～ローマ期の建築遺構が確認されている。

都市部では、南の最も高い地点にアクロポリスがつくられ、その北で、都市の南西部分にあたる地点に北の平野を見渡せる大規模な台地があり、宮殿と劇場が位置する。その北にはアゴラとエフクリア神殿 (Iero tes Efkleias)、更に北には公共建築物等の遺構が出土している。都市の東側には母神キュベレの神殿 (Metera twn Thewn Kyvele) があり、そのやや南側にヘレニズム期住宅跡が出土している。

ネクロポリスは、都市部北の、東西およそ3キロメートル、南北2キロメートルの広範囲に広がる²⁷。都市部から離れた北側部分は先史時代の「円墳墓地」、都市部に近い南側部分は古典期以降の比較的新しい時期の墓地が広がる。大墳丘は、この先史時代の「円墳墓地」の西側に位置する。

(2) ネクロポリスとその特徴

ネクロポリスは、北の都市部とはパリオパナギア川 (rema tes Paliopanagias) で隔てられていた。先述の「円墳墓地」には300基以上の小規模の円墳が確認されており、東側に位置する一群は鉄器時代初期 (前1000～700年) に遡る²⁸。近年の調査により、前7世紀以降の墓はより西方向にあったことが確認されている²⁹。「円墳墓地」では、5～15体の被葬者とその中の1体を中心に放射状に埋葬され、縁石で囲まれた最大直径20メートルの小円墳で覆われていた³⁰。M. アンドゥロニコスによれば、これらの被葬者は血縁者とみられ、各々、方形土壇墓や甕 (Pithari) 棺墓に埋葬されていた。この小円墳は複数で支群をなし、親族グループを形づくっていたとみられる³¹。

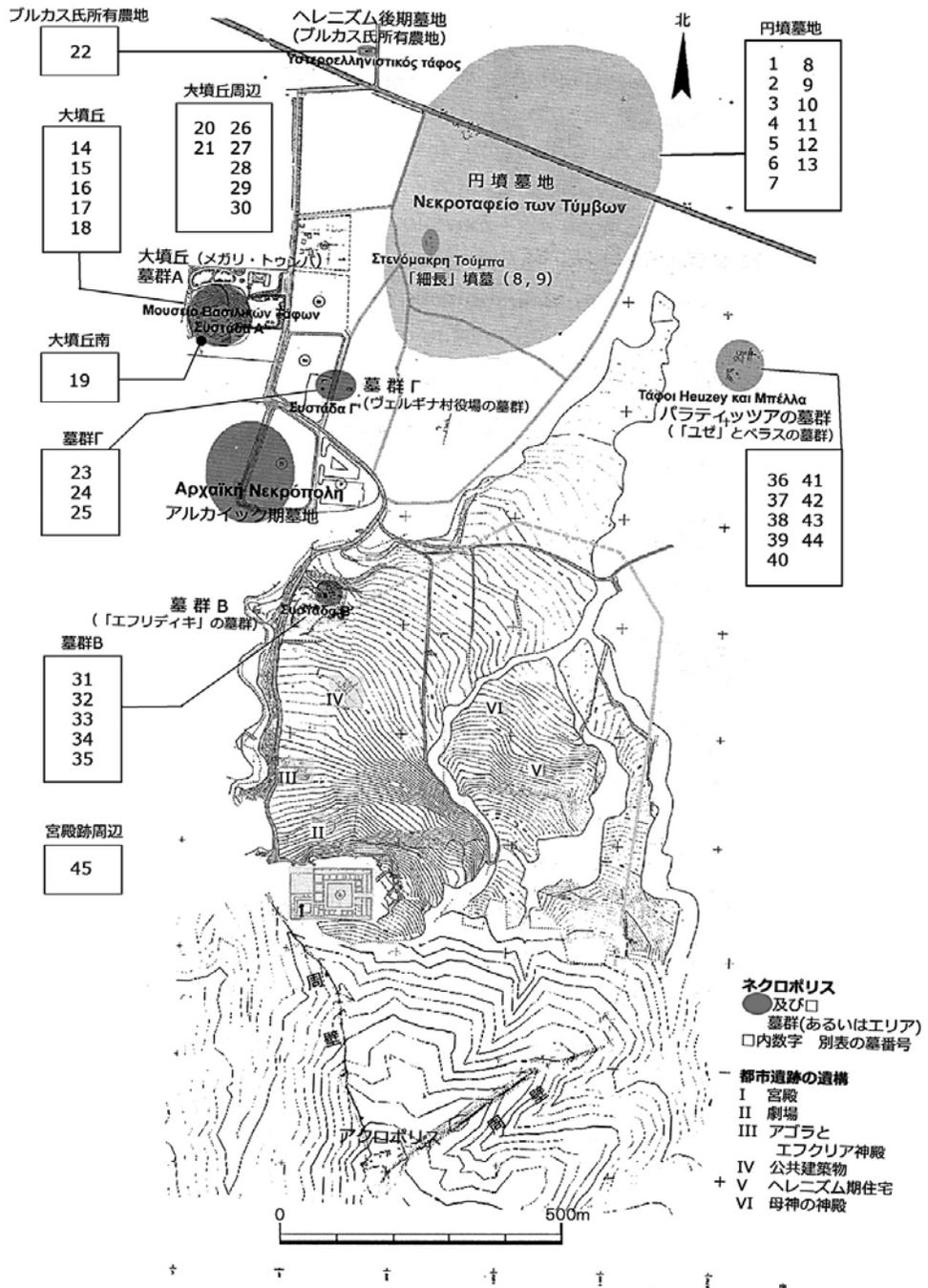


図4 ヴェルギナ遺跡：都市とネクロポリス

表 ヴェルギナの建造墓（箱形墓・室形墓）

番号	エリア	墓群名	墳墓(墳丘)名	墳丘規模	埋葬主体部	墓類型	埋葬形態	時期	備考			
1			△	*	中央の墓(KA1)	箱形	土葬	鉄器時代				
2			E	*	墓VIII(KA2)	箱形	土葬	鉄器時代				
3			P	*	墓II(KA2005③)	箱形	土葬	鉄器時代				
4			AA	*	墓V(KA4)	箱形	土葬	鉄器時代				
5	円墳墓地	-	LXXIII	*	墓A(KA16)	箱形	土葬	前4c				
墓B(KA17)					箱形	土葬	前4c					
墓H(KA18)					箱形	土葬	前4c					
8			「細長」	墳丘形(長さ43.7m)	墓B	箱形	火葬	前4c半ば前				
9				墓長(長さ24.25m、奥長12~13.40m)	墓Γ	箱形	火葬	前4c半ば後				
10			I	*	KA19	箱形	*	前4c後半				
11			Σ	*	KA20	箱形	火葬	前325~300				
12			Ψ	*	KA26	箱形	火葬	ヘレニズム期				
13			Z	*	KA27	箱形	*	ヘレニズム期				
14	大墳丘	-	大墳丘	直径110m 高さ13m	墓I(「ペルセフォネ」)(KA10)	箱形	土葬	前4c半ば				
墓II(「フィロポスII世」)					室形	火葬	前350~325					
墓III(「王子」)					室形	火葬	前310					
墓IV(「自由形柱」)					室形	*	前3c前半					
16					KA9	箱形	土葬	前5c後半				
17						室形	*	前2c後半				
18			大墳丘南	*		箱形	土葬	前350~325	同じ墳丘下か			
19			*	*	KA14	箱形	土葬	前4c	は不明			
20			*	*	KA15	箱形	*	前2c末				
21			ブルカス氏所有農地	*		室形	*	前4c末				
22			ヴェルギナ村役場(旧文化センター)	*		室形	*	前4c末				
23	大墳丘周辺 (墓群Γ)	-	*	*	墓4(KA5)	箱形	火葬	前6c後半				
24								墓2(KA6)	箱形	火葬	前5c	
25								1979I(KA11)	箱形	土葬	前320	同じ墳丘下か
26								1979II(KA12)	箱形	土葬	前320	否かは不明
27				1979III(KA13)	箱形	土葬	前320					
28				*	KA14	箱形	土葬	前350~325	同じ墳丘下か			
29				*	KA15	箱形	*	前4c	は不明			
30				*	「ロメオス」	室形	*	前4c末~3c前半				
31	宮殿跡北 (墓群Θ)	「エフリディキ」	-	*	「エフリディキ」	室形	火葬	前344	同じ墳丘下か			
32								K2(KA7)	箱形	土葬	前5c半ば	否かは不明
33								K1(KA8)	箱形	土葬	前430~420	
34								K3(KA7)	箱形	土葬	前4c半~330/20	
35				*	「ユゼ」	室形	*	前333~300				
36	バラティツア村 周辺	「ユゼ」とベラス (バラティツアの墓群)	-	*	「ユゼ」α(KA23)	箱形	*	アレクサンドロスIII初期				
37								「ユゼ」β(KA24)	箱形	火葬	アレクサンドロスIII末期	
38								KA26	箱形	土葬	ローマ帝政期	
39								KA27	箱形	*	前4c半ば	
40				*	α(寝台付)	室形	*	前3c前半				
41			ベラス氏所有農地	直径45m 高さ1m	β(戰士)	室形	*	前3c初				
42					γ	室形	*	前3c末~2c初				
43					KA25	箱形	火葬	前3c				
44	宮殿跡周辺	-	-	*	KA29	箱形	*	ローマ期				

凡例 - : 該当なし、* : 不明 埋葬主体部の名称KA: Kyriakou 2005. 117-119のリスト番号

これらの「円墳墓地」の南、特に南西部で、現在のヴェルギナの市街地の東側部分にあたる区域に、マケドニア王国形成・発展期の墓地が出土している。アルカイック期～古典期初め（前6世紀後半～5世紀）の墓は150を数え（「アルカイック期墓地」）、前4世紀の墓はさらに西に出土し、前3世紀の墓群は「円墳墓地」の東や北に確認されている³²。「アルカイック期の墓地」を含めた前6～4世紀の墓には、簡素な土壇墓の他に建造墓である箱形墓のグループが出現し、前4世紀後半にはいわゆる「マケドニア墓」（建造式室形墓）も出現する。これらの建造式の箱形墓・室形墓はいずれも墳丘下の埋葬主体部をなし、同じ墳丘下に複数墓が収まったものも多い。埋葬主体部を基本にすれば箱形墓33基、室形墓12基が確認されている（表）。これらの建築方式や壁画等の美術様式、豪華な副葬品は、同時期の王国が文化・宗教的に高い水準に達していたことを示している。

Ⅲ. 箱形墓の埋葬方法

(1) 分析

既述のように、本稿の目的は、ヴェルギナ出土の箱形墓のデータを「マケドニア墓」と共に取り上げ、相互に比較・検討する基盤を提示しつつ、そこから背景となる社会解明の糸口を探ることである。

この際に着目するのが、埋葬方法である。南ギリシア、特にアッティカと同様に古代マケドニアにおいても土葬と火葬が併存していたが、時期により比率が変わり、その変遷の要因は明らかにされていない³³。火葬については、近年の発掘調査の結果から古代マケドニアでは為政者層との結びつきが強い風習であったと見られている³⁴。ヴェルギナにおいてもネクロポリス全体としてアルカイック期以降に社会上層に属する男性、特に武人階層と火葬の結びつきが看取されている。ここでは、「マケドニア墓」と同じく社会上層に属する被葬者を擁する箱形墓におけるその傾向をみて、社会上層の一端を読み取ることにする。

分析の手順は以下の通りとする。α) 箱形墓と室形墓（「マケドニア墓」）の時期分布をみて両墓の関係を明らかにする。β) 主な分析対象である箱形墓の盛衰から時期を分け、各時期の埋葬方法をみる。

また、分析対象は先に確認した箱形墓33基、室形墓（「マケドニア墓」）12基である（表、図4）。表では、埋葬主体部を基本にして、同じ墳丘下に収められた主体部同士はまとめて列挙し、更に墓群、エリア毎にまとめて、枠で区切っている。ただし、墳丘が経年の風化・劣化あるいは人為的削平により消失しているものも多く、不明の場合はそれを表中に記載している。

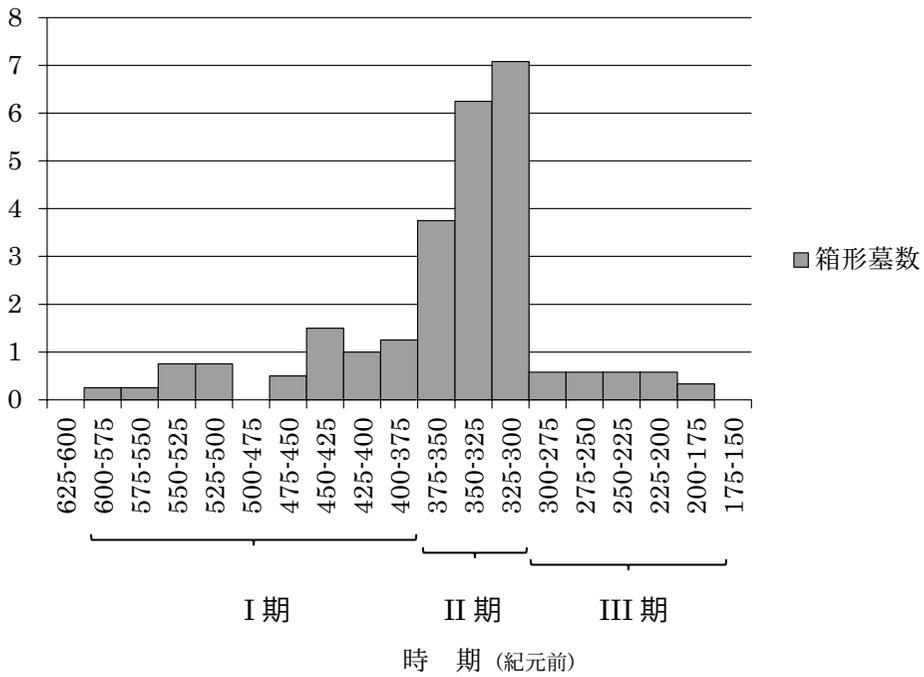
α) 箱形墓と室形墓の時期分布

箱形墓と室形墓の各々の時期分布をみた。各墓の時期については、発掘調査報告書から引用した。殆どが副葬品からの推定であると見受けられ、造営時期と使用期間の区別はないと考えられる。1世紀を4半期に分け、各墓の時期を比率的に割り振って総計した³⁵。その結果、箱形墓の時期分布はグラフ1-aのようになった。箱形墓は鉄器時代初期からヘレニズム期を通じて一定数存在するが、前4世紀第2四半期～前4世紀末にかけて飛躍的に数を伸ばしている。一方で、室形墓の時期分布は、箱形墓と併せて示せば、グラフ1-bの通りとなった。これによれば、室形墓は、前4世紀後半に突如として出現し、ローマ期まである程度数が保たれる。ただし、マケドニアがローマに降る時期（前2世紀第2四半期）は造営されていない。箱形墓と室形墓との関連をみると、前4世紀第3四半期に突如出現した室形墓の値が、前4世紀第1四半

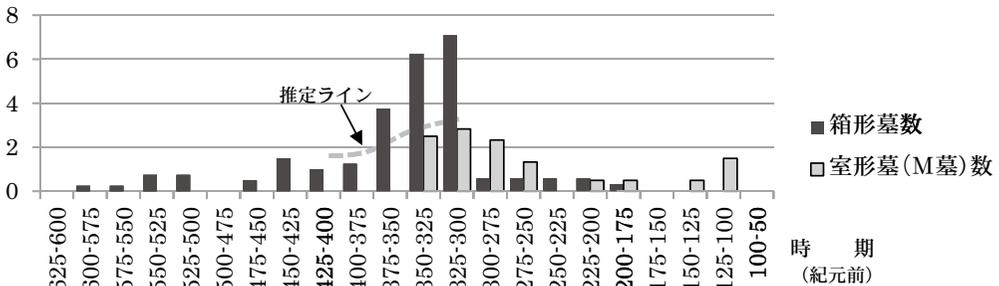
期以前の箱形墓数の近似線を伸ばした推定ライン上に位置するように見える（グラフ1-b）。

β) 箱形墓の埋葬方法の変遷

箱形墓の時期分布をみれば、その増減状態から、第Ⅰ期（前5世紀第1四半期～前4世紀第1四半期）、第Ⅱ期（前4世紀第2四半期～前4世紀末）、第Ⅲ期（前4世紀第1四半期～前2世紀第1四半期）に分けられる（グラフ1-a）。各々の時期の土葬と火葬の比率をみれば、第Ⅰ期では、土葬77.8パーセント、火葬22.2パーセント、第Ⅱ期では、土葬69.2パーセント、火葬30.8パーセント、第Ⅲ期では、土葬33.3パーセント、



グラフ1-a ヴェルギナの箱形墓時期別推移



グラフ1-b ヴェルギナの建造墓 (箱形墓と室形墓 (M墓)) 時期別推移

火葬66.7パーセント、となり、土葬から火葬へと変遷していく様相が見られる（グラフ2）。

以上の分析結果をまとめれば、次の通りとなる。ヴェルギナの古代社会上層に属する大規模墓は第Ⅱ期に大きな変化、つまり、箱形墓造営数の急激な増加、及び、室形墓の出現、の2つが見受けられる。そのうち、箱形墓の埋葬方法をみれば、時代が下るほどに火葬が増える傾向があり、特に第Ⅲ期にその比率が高くなる。

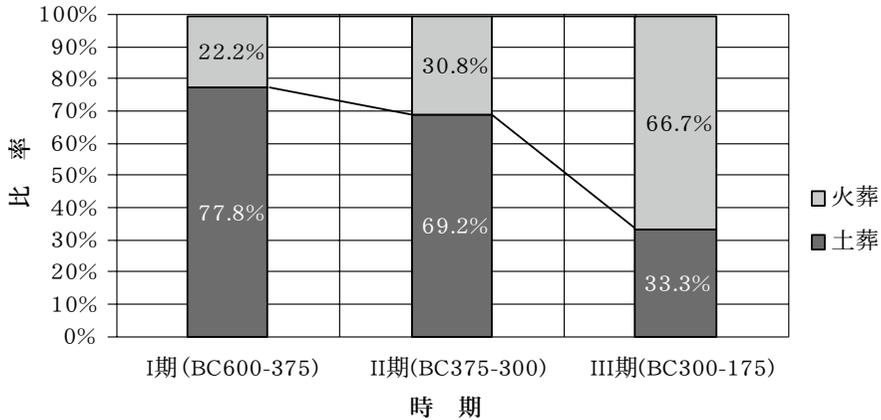
（2） 考察

箱形墓の時期分布により見出した第Ⅱ期は、フィリポスⅡ世、アレクサンドロスⅢ世（Alexandros Ⅲ：在位前336～323年）、東征後のカッサンドロス（Kassandros：在位305?～297年）までの時期で、東征や後継者戦争等に関わる武人階層の埋葬者が格段に多かった頃であり、大規模墓の急激な増加がそれを反映しているという理解が妥当である。室形墓の出現については、分析の項で述べたように、それまでの箱形墓数近似線の延長ライン上にあるとみれば、これは、前4世紀第1四半期まで箱形墓を造営していた集団が少なくとも前4世紀第3四半期以降に室形墓を造営し始め、一方で前4世紀後半にはそれ以前は箱形墓を作らなかった集団が箱形墓を造営した、という読み取り方も可能である。この場合、前4世紀第2四半期に造営されたが出土していない1～2基程度の室形墓が存在、あるいは、同時期の箱形墓の中に、室形墓に移行するような中間形の墓が存在する、と推測することもできる³⁶。そして、箱形墓の埋葬方法の変遷をみれば、はじめは土葬が優位であったが、徐々に火葬の比率が増していく変化がみられるが、特に第Ⅱ期と第Ⅲ期に大きな画期がみられる。

また、この考察の結果、以下の2つの問題点が挙げられることとなる。

第一の問題点は、第Ⅲ期の火葬比率急増の要因についてである。既述のように第Ⅱ期が武人階層の埋葬者が急激に増えた時期であるということを考えれば、遠方の戦没者を埋葬するのに現地で火葬を行なった後に遺灰を持ち帰ったと考えるのが妥当であり、第Ⅱ期に火葬の急激な増加が見られて然るべきと考えられるが、結果はそうではない。これはどのように解釈するべきであろうか。

第二の問題点は、ヴェルギナ・ネクロポリスの全体像を踏まえた際の社会上層の火葬比率が低いことである。既述のように、古代マケドニアでは初期鉄器時代に火葬が優位で、その後土葬の比率が勝るようになり、アルカイック期以降は社会上層を中心に火葬の比率が高まるが³⁷、ヴェルギナでも概ね同様の傾向がみられる³⁸。発掘調査報告によれば、少なくとも前6世紀から上層の男性被葬者—副葬品から主に武人階層



時期	件数		合計	比率	
	土葬	火葬		土葬	火葬
I期 (BC600-375)	7	2	9	77.8%	22.2%
II期 (BC375-300)	9	4	13	69.2%	30.8%
III期 (BC300-175)	1	2	3	33.3%	66.7%

グラフ 2 ヴェルギナの箱形墓における埋葬方法の変遷

だと考えられるが一を中心に火葬が広まった³⁹。一方、この時期（アルカイック期）には上層の女性は土葬であり、前5世紀後半から上層女性も火葬を施されるようになった。そして、前4世紀、特にフィリポスの治世の頃には庶民階層にも火葬が広がり、前3世紀にはヴェルギナ・ネクロポリス全体の火葬比率は4割にのぼる。つまり、これらの報告において、上層男性から火葬が広まり、上層女性、そして庶民階層へ広がったとされ、時代が下れば当然ながら上層は殆ど火葬であるように捉えられる。このような全体的傾向が報告されているにも拘わらず、このたびの分析では、社会上層に属すると考えられる箱形墓の、第I期の火葬比率は2割ほどであるし、第II期でも3割と低く、第III期で漸く6割を超える程度である。特に第I期は室形墓出現以前であり、箱形墓は当時の社会上層に属する唯一の墓形態であると考えられるがその火葬比率は少ない。この現象はどのような理由によるものであろうか。

第二の問題点に関して考えられるのは、ヴェルギナ社会上層にも全ての時期を通じて土葬の埋葬方法を堅持した集団の存在があるのではないかと、ということである。第一の問題点についても、第3期の資料数自体が少ないこと以外に、このような集団の動向に関わる可能性も考えられる。

IV. 今後の課題と展望

考察にて浮上した問題点から、今後は、社会上層を象徴する建造墓としての箱形墓と室形墓両方を含めた埋葬方法の分析をする必要がある。現時点では室形墓の埋葬方法についての情報は欠落しているものが多いが、火葬が執り行われた場所や供犠についての情報から分析することも可能であると考え。また、被葬者の性別や年齢についての分析により、社会上層における埋葬方法選択について更に細かい議論が可能となろう。

一方、ヴェルギナ・ネクロポリス以外に、前4世紀以降の王都であるペラのネクロポリスにおける建造墓も含めた分析をすれば、古代マケドニア社会上層に関するより包括的な像が描けるものと考え。

結語

本稿の分析において、建造墓を対象として社会上層の動向を見たが、本来なら社会全体を包括的にみるために庶民階層の墓まで広く精査する必要があるのはいうまでもない。ただ、既述のように、現地の調査報告では古典的美術的価値のある遺物に重きが置かれる傾向があり、それ以外の遺物のデータは公開されることが殆どなく、土壇墓や陶蓋墓などの単純な構造の墓、簡素なつくりの遺構についての情報収集には困難が伴う。したがって、外国人研究者としての筆者の立場においては、既存のデータを綿密に分析し、一方で先史期の調査結果も活用しながら、進めていく他はない。

EUを揺るがす経済危機以降、混乱を乗り越え少しずつ安定を取り戻してきたギリシアであるが、依然として公的債務は高く、失業率もEU内で最悪といわれ、市民生活にも不安や不満が満ちているという。このような中でも、ヴェルギナやペラなどマケドニアの歴史遺産を含め、ギリシアの誇る歴史遺産の発掘調査は地道に弛みなく行われていることが、将来への一筋の光明であり、また歴史の国ギリシアの大きな強みでもある。今後の調査の一層の進展が期待される。

凡例

名詞に関して以下の留意点を示す。なお、ギリシア語に関しては慣用化しているもののみを古典語読みで、研究上の用語や研究者名及び地名などは現代語読みとした。

【固有名詞】慣用語はカタカナのみで記した。それ以外に関し、研究上の用語、人名、

地名についてはカタカナに転記しその後の（ ）内に原語をラテン・アルファベットで記した。ただし、注釈内で原語がギリシア語の場合にはギリシア語アルファベットを使用している。なお、人名には、必要に応じて存命あるいは在位期間を記した。

【一般名詞】適宜邦訳し、場合によってはカタカナに転記し、（ ）内あるいは注釈に原語と若干の説明を加えた。

Abbreviations

AEMΘ *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη*

BSA *Annual of the British School at Athens*

図版典拠

図1-a Δημακόπουλος, Ι.Ε. *Κελύφη προστασίας εν είδει τύμβου – Βεργίνα, ένας υπόγειος αρχαιολογικός και μουσειακός χώρος, στον τύπο της κρύπτης*. Αθήνα 1997, Εικ.1 を一部改変して筆者作成。

図1-b Δρούγου, Στ. et al. *Βεργίνα. Η μεγάλη τούμπα. Αρχαιολογικός οδηγός*. Θεσσαλονίκη 1994, 18.

図2-a,b, 3-a 著者作成。

図3-b Θεμέλης, Π.Γ. και Γ.Π. Τουράτσογλου *Οι τάφοι του Δερβενίου*. Αθήνα 1997, Εικ.9、及 び、Δρούγου, Στ. και Χρ. Σαατσόγλου-Παλιαδέλη *Βεργίνα*. Αθήνα 2000, Εικ. 55.を合成して筆者作成。

図3-c Δρούγουκαι Σαατσόγλου-Παλιαδέλη 2000 *id* Εικ. 48.

図3-d Δρούγουκαι Σαατσόγλου-Παλιαδέλη 2000 (*supra* 図3-b) Εικ.86,88.

図4 Σαατσόγλου-Παλιαδέλη, Χ. 2009 “Βεργίνα 1977/87-2006”. *AEMΘ* 20 Χρόνια, Επετειακός τόμος, 296, Εικ.1、及 び、Κοντογουλίδου, Ε. “Σωστική ανασκαφή στην αρχαϊκή νεκρόπολη των Αιγών 2007”. *AEMΘ* 21 2007 (2011), 143, Εικ.1 を合成して著者作成。

注

1 1996年に文化遺産として登録。

2 Σαατσόγλου-Παλιαδέλη, Χ. “Βεργίνα 1977/87-2006”. *AEMΘ* 20 Χρόνια, Επετειακός τόμος (2009), 295-306.

3 ヴェルギナ・ネクロポリスに存在した墓類型の中で、大型の石板などの資材を組んで建造されたものには、箱形墓と「マケドニア墓」（建造式室形墓）があり、本稿ではこれら2類型を建造墓と呼ぶ。

- 4 Borza, E.N. *In the Shadow of Olympus. The emergence of Macedon*. Princeton, Princeton University Press 1990, 14. マケドニア考古学研究史については、松尾登史子「マケドニア考古学の成立と展開」『西アジア考古学』第9号、171~182参照。
 - 5 Τουράτσογλου, Ι. *Μακεδονία. Ιστορία-Μνημεία-Μουσεία*. Αθήνα, Εκδοτική Αθηνών 1991, 211~212. コゼとドメの報告は、Heuzey, L. – H. Daumet *Mission archéologique de Macédoine*. Paris 1876. この調査時に発見されたのは、「コゼ」の墓。表、番号36参照。
 - 6 Borza 1990 (*supra* n.4) 15~17.
 - 7 ロメオスの報告は、Ρωμαίος, Κ.Α. *Ο μακεδονικός τάφος της Βεργίνας*. Αθήνα, Εταιρεία Μακεδονικών Σπουδών 1951. この調査時に発見されたのは、「ロメオス」の墓。表、番号31参照。
 - 8 Borza 1990 (*supra* n.4) 17.
 - 9 デルヴェニの墓調査報告は、Θεμέλης, Π.Γ. και Γ.Π. Τουράτσογλου *Οι τάφοι του Δερβενίου*. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων 1997.
 - 10 Borza 1990 (*supra* n.4) 221~247.
 - 11 シンドス出土の副葬品については、Κυπραίος, Ε. *Ο χρυσός των Μακεδόνων*. Αρχαιολογικό μουσείο Θεσσαλονίκης 2000、ピュドナの「マケドニア墓」については、Παντερμαλής Δ. “Οι μακεδονικοί τάφοι της Πιερίας” στο *Οι αρχαιολόγοι μιλούν για την Πιερία, 28-29 Ιουλίου και 4-5 Αυγούστου 1984*, Θεσσαλονίκη 1985を各々参照。
 - 12 Kurtz, D. and J. Boardman *Εθνημα ταφής στον αρχαίο ελληνικό κόσμο*. Αθήνα 1994, 25. アッティカでは、遺灰を納めた土器あるいは陶器を安置した穴が底面に穿たれていた。土壙（あるいは岩壙）上を石蓋で多い、土を盛った。(Μαστραπάς Αντ.Ν. *Ελληνική αρχιτεκτονική – από τους προϊμους ιστορικούς χρόνους μέχρι τη ρωμαϊκρατία*. Αθήνα 1994, 39~40参照。)
 - 13 Κυριάκου, Α. *Η στενόμακρη τούμπα της Βεργίνας – Ταφικές πρακτικές στη Μακεδονία του 4^{ου} αι. π.Χ.* Αθήνα, Εκδόσεις Κορηλία Σφακιανάκη 2008, 113.
 - 14 その他、ニキシアニ (Νικήσιανη)、セスプロティア (Θεσπρωτία)、プロドウロミ (Προδρόμι) など。Θεμέλης και Τουράτσογλου (*supra* n.9) 136参照。
 - 15 Θεμέλης και Τουράτσογλου (*supra* n.9). その他、シンドスの前6~5世紀の豪華な副葬品も注目される。Θεμέλης και Τουράτσογλου *ibid*, 158; Κυπραίος 2000 (*supra* n.11) 54参照。
 - 16 横穴式室形墓は、丘陵斜面の軟質の岩盤を削って室形の空洞をつくったもので (Kurtz and Boardman (*supra* n.12) 1994)、多くは墓道を持つ。ミケナイ期に始まり、古代を通じて地中海全域に分布した。マケドニアにおいては、前4世紀後半に出現し、前2世紀後半まで盛行した (Λιλιμπάκη-Ακαμάτη Μ. *Λαξευνοί θαλαμωτοί τάφοι της Πέλλας*. Αθήνα, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων 1994, 94)。ヴェリア (Βέραια)、ベラ (Πέλλα)、エデッサ (Έδεσσα)、アンフィポリス (Αμφίπολις) などに多く分布しており、西マケドニアにも少数分布している。マケドニア全域で128基を数える (2008年現在)。Cf. Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 1994 *ibid*, 92.
- これらの、建造式室形墓、及び、横穴式室形墓、の名称は著者による。原語では各々、κτιστοί θαλαμωτοί τάφοι、及び、λαξευνοί θαλαμωτοί τάφοιであり、直訳は「建造室形墓」「岩削室形墓」であるが、著者が他の墓類型を踏まえてより適していると考えられる名称を与えた。これら2種の墓は、埋葬主体部が石を組んだ建造物かあるいは岩壁を削って部屋状にした構造物かにより区別される。ただし、これらは明確に区別され得るものではなく、定義と区別が研究者により微妙に異なる。Cf. Λαζαριδης, Δ. Ι. “Ανασκαφή της νεκροπόλεως Αμφιπόλεως,” *Πρακτικά* 1957, 70~72; Fedak, J. *Monumental Tombs of the Hellenistic Age: A Study of Selected Tombs from the Pre-Classical to the Early Imperial Era*. Toronto 1990.

- 17 Cf. Παντερμαλής 1985 (*supra* n.11).
- 18 Ginouves, R. *Η Μακεδονία, από τον Φίλιππο Β έως τη Ρωμαϊκή κατάκτηση*, Αθήνα 1993; Miller, S. *The Tomb of Lyson and Kalikles*. Mainz am Rhein 1993.
- 19 古代マケドニアの葬送儀礼や埋葬方法の研究全般については、Θεμέλης και Τουράτσογλου (*supra* n.9) 142~157; Κυριάκου (*supra* n.13) 241ff. を参照。
- 20 これらの諸問題については、松尾登史子「マケドニア墓埋葬主体部に関する考察—正面柱式の意味について—」『西アジア考古学』第12号、43~45参照。
- 21 大墳丘墓群以外の「マケドニア墓」や箱形墓の調査は継続されて年報などに調査報告がなされるものの、小規模で簡素な墓群については、位置や法量等の数値データ、図面、副葬品の詳細などは公開されていない。これらの墓群についての情報は、発掘者による報告者や論文において定性分析的に述べられるのみである。
- 22 Tomlinson, R. A. "The Architectural Context of the Macedonian Vaulted Tomb," *BSA* 82 1987, 306.
- 23 Andronikos, M. "Some Reflections on the Macedonian Tombs". *BSA* 82 1987, 1~16; Hammond, N. G. L. 1991 "Royal Tombs at Vergina: Evolution and Identities". *BSA* 86, 69-82.
- 24 箱形墓は「マケドニア墓」より出現が古い一方、「マケドニア墓」盛行期にも継続して造営されたとみられ、古代マケドニア王国存続時期を時間的に網羅する。
- 25 Δρούγου, Στ. και Χρ. Σααστοόγλου-Παλιαδέλη *Βεργίνα-περιδιαβάζοντας τον αρχαιολογικό χώρο*. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων 1999, 8; Δρούγου, Στ. "Βεργίνα 2001 – Minimalia." *AEMΘ* 15 2001 (2003), 549-557.
- 26 Δρούγου και Σααστοόγλου-Παλιαδέλη 1999 *ibid.*, 8.
- 27 Ανδρόνικος, Μ. *Βεργίνα-οι βασιλικοί τάφοι και οι άλλες αρχαιότητες*. Αθήνα, Εκδοτική Αθηνών 1984, 25; Κοτταριδη, Α. "Βεργίνα 1997." *AEMΘ* 10^Α 1996 (1997), 79-80.
- 28 Ανδρόνικος 1984 *ibid.*; Κοτταριδη 1996 *ibid.*
- 29 現在確認されているヴェルギナの都市部は古典期~ヘレニズム期であるが、前9世紀の集落跡も出土しており、居住跡が一貫して同じ地点にあったとすれば、ネクロポリスは徐々に居住地に近づいていったとの見解もある。Ανδρόνικος, Μ *Βεργίνα 2, το νεκροταφείο των Τυμβών*. Αθήνα 1969, 279.
- 30 Ανδρόνικος 1984 (*supra* n.27). Cf. Kurtz and Boardman 1994 (*supra* n.12) 174-175.
- 31 Ανδρόνικος 1984 (*supra* n.27).
- 32 コタリディはこれら歴史時代の墓地は、空地を求めてより開けた方向に移動したとみている。Κοτταριδη, Α. "Βεργίνα 1997," *AEMΘ* 10Α, 1996 (1997), 79-80.
- 33 Kurtz and Boardman 1994 (*supra* n.12).
- 34 Κυριάκου (*supra* n.13) 245.
- 35 報告書記載の各墓の時期は、例えば、A墓は「前4世紀後半」、あるいは、B墓は「前5世紀」、C墓は「前320年」等という表現である。本分析では、四半世紀を1単位として、各々、A墓は、前350~325年が0.5、前325~300年が0.5、とカウント、B墓は、前500~475年、前475~450年、前450~425年、前425~400年が各々0.25、C墓は、前325~300年が1、とカウントし各時期単位を総計して、時期分布のヒストグラムを作成した。
- 36 古代マケドニアの墓形態が箱形墓→室形墓と移行したとの前提がある場合。
- 37 Κυριάκου (*supra* n.13) 245.
- 38 Κυριάκου (*supra* n.13) 252.
- 39 Κυριάκου *ibid.*